

地域の児童を対象とした「運動あそび教室」の開催による成果と課題の分析
 —投能力改善を目的としたプログラム開とその運営の成果—

演習Ⅰ：○久田空,鈴木花怜,則本あず,安藤涼太郎,田畑来成,古橋明弥,松久晴紀
 企画・協力:川本菜々香,小林涼佳,オソリオ ユウキ バンゴイ,関口楽,浮田湊,泉大成
 演習Ⅲ:神田琴乃,宮城千裕,笠塚遥仁・運営協力:玉田梨乃、深田葉月、仁平紗知

1. 調査・研究目的（何を明らかにしようとしたのか）

2024年度、この演習Ⅰでは地域実践教育の一環として近隣の小学校児童を対象に運動あそび教室を大垣市教育委員会の後援を得て実施している。本年度（2025）は、昨年度の反省を活かして「走動作」と「投動作」の遊びを実施するだけでなく、教室前後にて遠投能力を測定して投能力の改善の効果を実測する教室を学生のみで企画・運営した。本研究では、その教室の企画・運営に携わった全ての学生を対象に「スポーツ事業の経営的視点」での質問紙調査を実施し、準備段階から全ての過程で生じた成果と課題を分析して次年度に活用できる改善点を見出すことを目的とする。



2. 調査・研究方法（どのような方法で目的を達成しようとするのか）

1) 企画の背景の確認（なぜ運動あそび教室を開催する必要があるのか）全学生での認識の統一方法

認識の共有 (1) 体力低下=健康体力や運動能力の未発達、日常的な少ない身体活動は、**生きる力や意欲の低下・活力の低下に繋がる**、(2) 身長、体重など子どもの**体格は向上**しているが、体力・運動能力が十分に発達していない（子どもの体力の現状と将来への影響（文部科学省,2016））、(3) 運動能力（走る・投げる・跳ぶ 等）の中で投能力の未発達が著しく、思い通りにコントロールできない、遠くに投げられないは、**運動が楽しくない**に繋がりがかねない。達成感なしに運動好きにはならない。

「投げる動作」の動作発達段階の特徴	動作パターン
パターン1 上体は投射方向へ正対したままで、支持面（足の位置）の変化や体重の移動は見られない	
パターン2 両足は動かさず、支持面の変化はないが、反対側へひねる動作によって投げる	
パターン3 投射する前と同じ側の足の前方へのステップの導入によって、支持面が変化する	
パターン4 投射する前と逆側の足のステップがともなう	
パターン5 パターン4の動作様式に加え、フィードバックを含む、より大きな動作が見られる	

2) 2025年度プログラムの特徴（教職課程学生が中心に開発）

基本的なスポーツ動作の一つの投動作は、後天的に獲得される動作の一つであり、走る・跳ぶといった基本動作とは発達の過程が同一ではない。その獲得（発達）は未就学時期（小学校入学前）に**豊富なボール運動（あそび）の経験が重要**である。その後の児童期の投能力レベルが生涯スポーツ参加あるいは社会性に影響しないとは言えない。投動作は右図のように獲得される（幼児期運動指針ガイドブックより引用）。

2025年度プログラム

- ① 身体計測（身長・体重）・**投能力（遠投距離）の測定（事前値）** 計測値は賞状に記録して最後に渡す
- ② アイスブレイク・準備体操（からだジャンケン・言うこと一緒やること一緒）
- ③ 投げ方練習（ステップ動作）：体重移動・投射方向・肘の高さ・ステップ位置などを個別に指導
- ④ 新聞紙破り（ステップ動作） ③と④で15分程度
- ⑤ 投げ方練習（助走動作あり）
- ⑥ 新聞紙破り（助走動作あり） ⑤と⑥で15分程度
- ⑦ どんジャンケンあるいはネズミ逃がし
- ⑧ 爆弾ゲーム
- ⑨ **投能力（遠投距離）の測定（事後値）**
- ⑩ 尻尾取り鬼
- ⑪ 賞状・メダル授与 挨拶 お見送り





3) 調査対象（誰を対象に何を調査したのか）

今回は、スポーツ事業の運営面の改善点を抽出するため、本事業に携わった全てのスポーツ専攻学生（1年次（2名）、2年次（13名）、4年次（3名））を調査対象とした。

4) 調査方法・調査項目・分析方法

調査方法は、自由記述質問紙法を用いて調査項目の「このスポーツ事業の企画・運営に関わり気づいた成果と課題は何ですか」の質問に自由記述にて、事業終了直後に回答させた。

得られたサンプルは、Kj法を用いて文中からコードを抽出して、ガテゴリーごとに分類してそれぞれのグループを命名した後、グループ間の関連性を検討して成果と課題を顕在化させ、次年度に向けての改善点を導き出した。

アイスブレイク

からだじゃんけん

投げ方練習

爆弾ゲーム



5) 研究倫理：岐阜協立大学「研究倫理リーフレット」に従い、個人情報保護等の教育を受けてから研究を開始した。

3. 調査・研究結果（何が明らかとなったのか）

1) 本事業に参画したことで得られた成果

- ・児童に直接かかわる実体験（模擬でなく）、運営管理・準備進行の重要性の気づき

2) 顕在化した課題（今後、学びを深めなければならない事項：専門家になるために）

今回は「指導法」に関連する褒め方や接し方、目線及び運営面の課題が抽出された。

- ・ボール投げ指導を通して褒めることが一番大切と気づいた。また「褒め方」も重要。

- ・話を聴いていない子どもに声をかけられなかった

- ・子どもは、「わかる」→「できる」→「自信になる」→「やる気になる」という特性があり、それを活かし、短く一つずつ丁寧に伝え、見てわかるよう示し、できる課題から成功させる、という段階を踏まえる。（子どもの特性に応じた指導法）

- ・子どもに対する接し方や対応の仕方を考えながら行動する。

- ・子どもの目線に合わせて行動する。

- ・運営の課題：参加しただけの活動にならないよう役割をもっと的確に決めるべきである。



